

緑のまきば

1972. No 7

小金井緑町教会
 小 金 井 緑 町 教 会
 小 金 井 市 緑 町 四 一 一 六 一 三 三
 電 話 〇 四 三 一 八 一 一 七 九 六 一
 編 集 牧 師 山 本 圭 一

教 説

まことのぶどうの木

山本圭一

「わたしはまことのぶどうの木である」(ヨハネ15章1)とキリストが語られた時、退化し野生した野ぶどうのことを問題にされたことは確かである。「わが愛する者は土肥えた小山の上に、一つのぶどう畑をもっていた。彼はそれを掘りおこし、石を除き、それに良いぶどうを植え、その中に物見やぐらを建て、またその中に酒ぶねを掘り、良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ。ところが結んだものは野ぶどうであった。(イザヤ5章1-7)」選ばれたイスラエルの墮落が重大なのである。聖は教会の外形ではなく内実である。内側が荒廃していなければ、切り株からも新しい生命の芽はもえいでる。

しかし本来の明るい姿と現実の暗い姿との間に横たわる大きさをへ

だたりが、見のがされていらない。愛するものの痛みは、相手の中に横たわる傷のゆえに消え失せることはない。当の本人が自分の傷を気付かなくても、愛は痛み続け、その傷にふれて人知れず恐れ、涙を流す。と同時に愛はこの傷をみずからの責めとして負う。

「実を結ばないものをとりのぞき：もっと豊かに実らせるために手入れしてきれいなさる。」ここにのべられていることは、

結果的にはとりのぞかれ、切り捨てられたぶどうの枝である。この情景ではそれは歴然としている。しかし、事はまだほんの一面にすぎない。良い実を得るため土を念入れに整備し、徹底的な刈込みをする農夫の愛の労苦が隠されているのではないか。農夫の配慮の中でぶどうの木と枝との生命的なつ

ながりが育ったのではないか。

II

今日、教会生活がいっているのをおもわくで圧迫されることが多いわれわれの関心を外に向け、しまり要素があふれているからである。乏しさに耐える状況ではなく、豊かさに甘える構造で埋まっている。人は得ることによってますます失い、自分の殻の中から脱出できないでいる。この脱落、この不条理。しかし、この中で告げられるまことのぶどうの木のメッセージは、あらゆるキリスト者の宗教経験において、この闇と自己嫌悪に終りを告げる。キリスト者は霊において時と世界を越えているけれども、現実にはこの世界の中にとどまり、時の支配を受け歴史の悪に直面する。しかし、歴史の経過は圧力と摩擦が働くにつれて新しい意味を獲得した。キリスト者はこのような圧力と摩擦の下で自己の魂を精錬しなければならず、その下にいてのみキリスト者は自分の真の運命を全うすることができる。まことのぶどうの木としての主イエスの真実に絶えず直面することは、世界に対する人間の態度を變革するのである。